

神戸大学 大学教育推進機構 大学教育研究

第 17 号 (2008 年度) 2008 年 9 月 30 日発行 : 43 - 57

授業改善に関する実践的研究
11 . ピアレビューについての一考察

米谷 淳

授業改善に関する実践的研究

11. ピアレビューについての一考察

米谷 淳（神戸大学・大学教育推進機構）

1. はじめに

神戸大学全学共通教育部は平成20年度に第一回「ピアレビューウィーク」を実施した。10人が授業を公開し、それぞれを教育部会員と評価専門委員が参観し評価した。私は4つの授業のピアレビューを行い、ピアレビューウィーク終了後に開催された意見交換会・検討会に参加して関係者と討議をした。本稿ではピアレビューに至る経緯を述べ、私がみた授業について記述した後に、意見交換会・検討会の配布資料¹と記録²を踏まえながら全学共通教育の教育改革におけるピアレビューウィークの意義と今後の課題について論じる。

2. 経緯

本学の教養教育を大学教育研究センターが実施するようになったのは平成4年からであり、その研究部が本格的なファカルティ・ディベロップメント（以下、FDと略す。）に関する取組を開始したのは平成6年からである。活動報告に入る前に、大学教育研究センター時代から、平成20年度に初めてピアレビューウィークが実施されるまでの経緯をふりかえっておく。

ピアレビューを教員、とくに、同じファカルティ（学科，学部，研究科）の教員（同僚）が互いに授業を見たり見せたりする取組とするなら、その意味でのピアレビューは大学教育研究センター時代にすでに実施されている。平成8年度から平成9年度にかけて2年間、私と山内乾史教授（当時，助教授）が互いの授業を参観し、毎回、授業終了後に検討会を行った。平成8年度後期は私の全学共通授業科目「心と行動」の授業を山内教授が参観し、平成9年度後期は山内教授の全学共通授業科目「発達と教育」の授業を私が参観した。いずれも授業風景をビデオ撮影し、検討会ではそれを再生しながら授業の内容・方法や学生の反応などについて話し合った。しかし、この取組はFDというよりむしろ授業研究という色彩が強いものであった。確かに毎回の授業参観と検討会での議論を通して多くの気づきや学びが得られ、授業観や大学教育についての考え方を練磨し、幅を広げ、深めることになったが、それは結果としてそうなったものであり、その時の第一目的は相互参観によるFDの方法を検討し、授業参観をする上で重要な観点を見出すことにあった。

その後、全学共通教育における教員相互の授業参観は昨年ピアレビューウィークが開催されるまで実施されなかった。授業公開、授業参観、ピアレビューのどれについても大学教育研究センター時代（平成4年～平成7年）には内部で懸念や反対意見がことあるごとに出され、具体案の検討に至らなかった。全学共通教育の授業を負担としかとらえない教員は少なくなく、彼らの不満は大きかった。また、大学評価や重点化が叫ばれ、研究業績への圧力が強まっている状況があり、すべての教員が教育活動にさらに時間をとられることに対して陰に陽に抵抗を示したし、そうした中で教員評価、とくに教育評価に対して様々な方面から警戒がなされていた。一方、ピアレビューの組織的实施に向けた環境づくりをすべき部署と期待されていた研究部スタッフは、シラバス、学生授業評価のシステム化とシステム運用・改善、FD講演会の企画・実施、さらには、大学評価のための資料作成や競争的資金獲得のための申請書類作成などで忙殺され、ピアレビューの事は後回しにされ、棚上げにされた。

「多忙な教員の時間を割いてまで、自らの専門領域と異なる科目を参観させることにどんな意味があるのか」という疑問・意見がいろいろな席上で出されたし、自問自答することもしばしばあった。が、この全学共通教育ならではの問いかけに対して、根拠のある有効な反論が見出せないでいたことも事実である。確かに、その頃は専門の異なる教員どうしによるピアレビューの効果についての有力な根拠も効果的な方法もみあたらなかった。

大学教育研究センターが改組され、大学教育推進機構ができた頃、こうした状況が大きく変化した。その少し前に、ピアレビューを積極的に推進する部局があらわれた。平成14年度に法学部は学部をあげて教員相互の授業参観を開始し、その後、法科大学院、法学研究科の授業についても毎年実施するようになっていく。その後、神戸大学では全学的に教員相互の授業参観を推進することになった。これを神戸大学の中期計画及び年度計画からみてみよう。第1期中期計画の中に「教員相互の授業参観等を平成16年度から試験的に導入し、その経験を踏まえて適切な導入方法を定める」ことが明記されている。年度計画では平成16年度は「法学部及び国際文化学部において、教員相互の授業参観等を試験的に導入し、その評価を進める。」となっていたものが、平成17年度では「教員相互の授業参観等の導入を拡大する。」、平成18年度では「教員相互の授業参観を更に拡充し、制度としての確立に向け検討を行う。」、平成19年度では「平成18年度に引き続き、教員相互の授業参観を更に拡充し、教務委員会等においてFDの制度的確立に向けた検討を行う。」となり、平成20年度には「全部局で教員相互の授業参観（ピアレビュー）を試行的に実施し、教育のPDCAサイクルの実現に向け、教育担当責任者会議でその具体化を図る。」となった。

こうした全学的な状況の変化の中で、全学共通教育におけるピアレビューが再び議論の俎上に上ることとなった。平成 19 年度に全学の教務委員会でピアレビューが取り上げられ、副学長（教育担当理事）から各部局にそれを推進する計画を出すよう指示があった。それを受けて、全学共通教育部の評価・FD 専門委員会でピアレビューの実施について話し合いがもたれ、平成 20 年度に半数の教育部会が 1 コマずつ授業を公開し、いずれかの教育部会から 1 名と評価・FD 専門委員 1 名がそれを参観するピアレビューウィークを開催する案を作成して運営委員会に報告し、それが了承された。平成 20 年度に評価・FD 専門委員会で具体的な実施案が作成された。そして、平成 20 年度は 20 の教育部会から名簿順に上位 10 の教育部会が 1 コマずつ授業を提供し、11 月に実施することになった。また、ピアレビューの際、参観者が簡単な評価表をもちいてチェックとコメント記入を行い、ピアレビューウィーク終了後に関係者が集まって講評しあう検討会を開催することになった。

3. ピアレビューウィークの実施

ピアレビューウィークには 10 の教育部会が 1 コマずつ授業を提供し、のべ 22 名が参観した³。参観者の内訳は、12 の教育部会から 12 名が参加しており、参観した授業数は 4 コマが 1 名、2 コマが 4 名、他は 1 コマである。評価・FD 専門委員は米谷を除いて教育部会長であるが、評価・FD 専門委員として参観した 9 名の中には、教育部会員として他の授業を参観した者が 3 名いる。当初、10 名の評価・FD 専門委員が参観する予定であったが、1 名が都合で参観できなくなり、私が代理となった。また、評価・FD 専門委員とともにすべての授業を最低 1 名の教育部会員（主に部会長）が参観することになっていたが、授業等のために 9 名（8 教育部会）しか参観できなかった。2 つの授業では複数名が教育部会側からの参観者となっており、教育部会委員が参観した授業は 10 コマ中 7 コマとなった。

4. 授業参観記録

今回授業参観の対象となった 10 の授業のうち私は 4 つの授業を参観することができた。私の専門である心理学の授業はなかったが、今回初めて参観できた科目ばかりであり非常に興味深かった。以下に当日の授業概要と所見をまとめる。

(1) 「政治の世界」(担当 中村) 11 月 11 日(火) 1 時限

授業開始少し前に授業者は 200 名が入る教室の入口近くの机の上に配布資料(B4)と質問・感想の提出用紙(B6)を置くと、学生が各 1 枚ずつとっていった。4 面の黒板の

中央にスクリーンが下されており、パワーポイントのスライドが提示されていた。配布資料はそれを表に8枚、裏に7枚が白黒モードで印刷したものであった。8時50分のチャイムと同時に授業者は「おはようございます」と挨拶し、講義を始めた。最初に、先週の授業終了時に回収された提出用紙に学生が書いた質問を3つとりあげ、それについてやわらかい口調でいねいに解説を加えながら答えた。これに15分かけた後にその日の内容に移った。先週の配布資料の裏面にあった「シャロンブッシュの対テロ戦争」と題するスライドの解説から始まり、「日本のパレスティナ・イスラエル政策」、「日本の立場の説明」、「解決の道筋は?」と題したスライドまで解説を進めた。そして、9時30分頃に「今日のQUIZ」と題するスライドを見せて、学生に答えを考えさせた。数分時間をとった後で答えを言い、「以上で中東和平の話をいったん終わりとします」として第4回の講義を締めくくった。そして、間をおかずに当日の配布資料にある「第5回 政治の世界 イスラーム」の講義を開始した。8枚目のスライド「六信五行」の解説を終えようとしたときに授業終了(10時20分)のチャイムが鳴った。そこで、授業者は「質問がある人は質問を書いて出して下さい」と言い、授業を終えた。

スクリーンに映し出されたスライドは見やすく簡潔にまとめられており、要所を青字や赤字にして注意を引き付けるように配慮されていた。それを印刷した配布資料も字の大きさも適切であり、読みやすかった。自ら中東に行って調べてきたばかりのことを講義するので、中東政治に関心のある者にはすこぶる興味深いものであろうし、それほど関心のない者でも惹きつけられてしまう内容となっている。語りかけるような柔らかい口調はときに単調に感じられることもあるが、集中して聴く者には心地よく聞きやすい。確かに授業態度に問題のある学生も見られた。授業の前半では遅刻者が目につき、後半では無断で数名が退室した。居眠りや私語をする学生も目に付いた。授業者はそういう学生を気にかけるそぶりを見せずに、淡々と講義を続けていた。しかし、そうした姿勢は学生の質問への答え方やクイズも含めたスライドの作り込みなどと合わせて考えるならば、学生に背を向けた独善的なものではなく、一生懸命講義を聞こうとする学生へのひたむきな姿勢であることに気づく。中東情勢に関心を持ち、興味深い講義内容を傾聴している学生とのおだやかな語らいの場をつくりあげ、維持しようとする授業者の熱意と思いやりが感じられ、とても好感のもてる授業となっていた。

(2) 「応用科学技術」(担当 富田)11月11日(火)2時限

授業開始5分前には大教室はほとんど満席であった。教壇付近に2名のTAがおり、1名はノートパソコンのセッティング、もう1名は各机を回って資料と提出用のシートを配布するとともに、チョークを1つの机につき2本ずつ置いていった。ほどなく授業

者が入室し、チャイムとともに授業が始まった。授業者ははじめにこの授業科目では3つの分野を4回ずつ講義すること、今日から材料について話をすることを説明した。そうしている間に2名のTAが教室をまわってすべての出席者に針金とセロハン(幅5mm程度)を1つずつ手渡した。どちらも3cm程度に切られていた。授業に入る前に、授業中にスクリーンに提示する教材をホームページに置いていることが告げられた。それから、日本の工業力の世界順位が下がっていること、神戸大学のグローバルエクセレンス計画(ビジョン2015)、富田研究室の紹介、工学の定義、機械工学における材料の開発・評価の重要性などについてスライドを用いて矢継ぎ早に説明した。そして、大学教育のコストについて言及し、1回授業を欠席することでどれだけのお金が無駄になるかよく考えてほしいと学生に語った。ちょうどそのころ、私が座っていた最後列に出席表が回ってきた。ここまで授業開始から30分が経過していた。それから、その日の授業内容「体験してみよう材料のふるまい」に入った。そこで、すでに学生の手元に配布されているアルミの針金、セロハンのテープ(セロテープではなく表面がすべすべしている)、チョークが、それぞれ、弾性・塑性、脆性・延性、疲労を体験するための材料であることが説明され、順にそれらの材料特性を学生が自分で確かめるよう指示が出された。アルミの針金は力を加えていったん曲げるともとに戻らず形ができる。セロハンのような高分子でできたテープはある程度引っ張るともとに戻らなくなるが、それからかなりな長さになるまで均等に伸びていく。チョークは曲げ、ねじれに弱く、45度で折れる。学生は簡単な実験により、こうした材料特性を体験的に学んだ。さらに、針金をある角度まで曲げて戻すのを何回繰り返したら折れるかを、30度、90度、180度の3つのグループに分けて測定させ、その結果、回数が30度>90度>180度の順となることを説明した。さらに教卓の上に細長い棒、太い木の棒を置いてこれを曲げるとどうなるかデモンストレーションしながら説明した。こうする間に12時近くになった。授業者は次週の予告をしたのち、学生に提出用のシートにその日の感想や質問を書いて提出するように指示した。その際、「どれくらい書いたら適当かも自分で判断してください」と言った。また、質問の内容もHPにのせていることを告げた。こうして授業が終了した。

授業はよく構成され、よく準備され、学生の興味を引くような写真や事例やデモンストレーションが盛り込まれたアクティビティーの高いものであった。スライドや黒板の字が小さくて最後列からは読めないところもあったし、マイクの音量もやや小さいと感じた。しかし、200名を超える学生が静かに授業を聞いており、授業者の声は教室の最後列でも十分よく聞き取れた。授業開始20分後までは数えただけで8名の学生が遅刻して入室したが、途中で退室する学生はいなかった。そして、授業者の指示に従って、材料特性についての実験を行い、授業の最後のライティングタイムには多くの学生が黙々と

かなりの分量を書いていた。こうしたところにあらためて神戸大学生らしさを感じた。彼らはやや控え目でおとなしく従順であり、まじめでよく勉強する。こうしたイメージの醸成には長年優秀な中堅エンジニアを輩出してきた工学部が大きく貢献していると考えられる。ものづくりは人づくりに通じることを再認識させられた、実に工学らしい授業であった。

(3) 「数学」(担当 高橋) 11月18日(火) 2時限

チャイムと同時に授業が開始されたが、5分後も学生の私語が止まなかった。そして、2時限であるにもかかわらず30分後までに8人が遅刻して来た。彼らは100人程度が収容できる縦長の教室の後ろの方に着席した。後ろの方で私語やメールをしている学生が目についた。一人の学生は11時30分すぎに入室して後ろの方に着席し、ノートも教科書も出さずにしばらく授業を聞いていたが、それから授業を参観している教員が複数いるにもかかわらず、平然とパンを食べ始めた。また、時折教室がざわつき、授業者の声が最後列で参観している私に聞き取れないことが何度かあった。一方、縦長の教室の前半分では粛々と数学の講義が進められていた。遅刻者が群れ、態度の悪い学生が目につく後方とは別世界のようなようであった。

授業開始と同時に授業者は黒板の左半分程度のスペースに定理を書き、それから板書しながら解説を始めた。10時48分に授業者は私語が気になったのか、説明(と板書)を中断して学生の方を向き、静かになるのを待った。解説が進み板書も黒板の左の部分から中央部へ、そして右の部分へと進んだ。11時5分ころから例題の解説にうつった。そして、11時10分に「それでは問題をやってもらいます」といって、問題用紙(A4)を学生に配布し、1問目を解かせた。配布が終わった後も授業者は教室内を巡回して学生の答案をチェックしたり質問に答えたりした。11時17分に黒板のところに戻って1問目の解説をした。11時37分から新たな例題を板書し、2つの解法を説明した。11時50分から配布した問題用紙の2問目を解くよう学生に指示し、巡回して個人指導をした。12時から補足説明をして授業が終了した。

オーソドックスと言えるほどの典型的な数学の授業であった。 x と y の関係式で定められる陰関数 $y = f(x)$ の導関数と2次導関数を求める方法がテーマであった。黒板に問題と解がきちんと書かれ、授業者は板書しながら、ときには黒板消しで前に書いた部分を消しながら、説明を続ける。私が高校時代に受けた数学の授業とほとんど変わらないものであった。これは決して悪く言っているわけではない。逆である。私は高校時代まで数学が得意であり、数学の授業が大好きだった。そして、理路整然と、しかも簡潔明快に難問を解き明かす数学教師にあこがれたほどだった。黒板とチョークだけ、

一方的な説明に終始する知識伝達型の代表のような数学の授業は、数学好きにはたまらなく知的でスマートな授業であり、授業方法も実に合理的と感ぜられる。今回参観させていただいた授業でもそうしたことを感じた。授業者の教員としての力量と経験の豊かさ、温かさと誠実さが感ぜられるていねいな学生への対応、謙虚だが自信にあふれた授業への姿勢が授業から伝わってきたし、それらが学究肌の数学者としての日々の研究に支えられていることも推察された。今回の授業はそうした数学者らしい授業であったといえるだろう。

一方、数学が好きでない者にとって、数式だけが次々と出てくる授業は無味乾燥で全く面白みの感ぜられないものだろう。苦痛に感ぜられるかもしれない。こうした二極分化の構造がこの日の授業でも確認できた。授業はきわめてよく準備され、説明もほとんどが明快であり、黒板の字もほとんどが大きくていねいに書かれており実に見やすかった。授業者は遅刻者や授業以外のことをしている学生を注意せず、私語をする学生をにらみつけることもしなかったが、多分そのような教室管理はかえって教室の雰囲気悪くするだけであり、前の方で授業に集中している学生にとっては私語よりも、私語などを注意するために授業が中断されることの方が迷惑だろう。しかし、教室の最後列で授業を参観する者にとっては、後方のざわつきによりしばしば授業者の声が聞きとれなくなったし、メールなど授業以外のことをしている学生が気になって仕方がなかった。そうしたいらだちからもあり、すぐ前の席で食事を始める学生を何度もどなりつけたくなかったが、自重し授業参観者の役割に徹した。

こうした授業態度の悪い学生をどうするか、意欲や興味のない学生をどうするか。この問題を解決するには授業担当者だけでなく、教育部会、全学共通教育部、さらには大学全体で問題を共有し、統一方針のもとで協力して対処することが必要である。全学共通教育部でもいろいろな対策を講じてきている。数学教育部会では個人指導のための部屋を3室用意し、当番制で教員が在室して学生の質問に答えている。また、演習形式の授業を充実させる努力を継続している。現在進めている共通教育棟の改修工事により学生の個人指導のためのスペースが拡充される予定である。また、新たな学習支援システム構築の計画がある。こうした取り組みの成果はすぐにあらわれるものではないだろうが、少なくとも二極分化の構造の是正・解消へ向けた努力は必ず心ある学生に通じるものと確信している。

(4) 「哲学」(担当 松田)11月19日(水)1時限

「教養の哲学」と呼べる内容の授業である。教養原論の科目であり、旧カリキュラムにおいては「人間と世界」という主題の下で哲学の授業がなされており、「哲学」という

名前の授業はなかった。配布されたプリントから、その日は第8回「私の哲学の始まり」の1回目で「『本当の私』と『偽りの私』？」というテーマであることがわかった。配布資料はA4の裏表に1ページ6枚のスライドが収まっており、第8回の配布資料には17枚のスライドが用意されていた。もう一枚の配布資料には十牛図が印刷されていた。授業開始前から大教室の4面の黒板の中央に下された大きなスクリーンにこれと同じスライドがカラーで映されていた。教室の入り口付近の机には配布資料と提出用紙（返却用と提出用）が置かれており、学生はそれをとって席に着いた。

8時50分のチャイムと同時に授業が開始した。最初に授業全体の概要が説明された。デカルトから講義を始めてきており、その日が「私」についての哲学に入っていくことが説明された。9時5分には60名を超える学生が教室で静かに講義を聞いていた。大きなスクリーンに映し出されたスライドには文字の他、写真やイラストが効果的に使われており、マイクを通して授業者の声もちょうどよい音量で耳に入ってきた。じっくり話を聞いたり、考えたりするには適した講義スタイルであり、適度なタイミングで現れるカラフルな挿絵がイメージを膨らませるのに役立った。授業はデカルトからイギリス経験論のロック、ヒュームへ、そしてライル、マッハ、キルケゴールの説が、日本人の現代詩やギブソンが使用した視覚世界の図や仏教の教義が途中で挿入されながら、解説されていった。スライドを投影するために暗くされたステージに明るく照らされるスライドを見ながら淡々と語る哲学者から発せられる言葉を聞いていると、詩の朗読や現代劇を観賞しているような気持ちになってくる。50分が経過する頃に突然スクリーンが暗くなった。パソコンの調子が悪くなったのか、それとも、操作ミスかわからないが、1分間ほど授業が中断したが、その後、回復した。そして9時50分ごろからその日のメインテーマに入った。こうしてチャイム終了まで話し続け、授業は終了した。すでに授業中に感想や質問を書いていた学生もかなりいたようで、授業終了まもなく学生はぞろぞろ、提出表をドア付近に座っていたTAに渡して教室を出て行った。

この授業でも前日参観した「数学」の授業と同様、教室そして学生の構造化、すなわち二極分化が認められた。授業開始後45分が経過した9時30分少し前にチェックしたところ、前方に座った30名程の学生は実に熱心にノートを取り、資料とスクリーンを見ながら授業に集中している様子であった。一方、後方に着席した半数の中に居眠り（8人）、授業以外の勉強（9人）、携帯電話・メール（1人）、私語（2グループ、4人）が目についた。最後列中央に着席した私はほとんどすべての学生の様子が確認できたが、授業以外の勉強をしている学生が後方では9人いたのに対して、前方には1人しかいなかったし、居眠りや携帯電話・メールは一人もいなかった。その後、授業終了近くにチェックしたところ、私語を除いて、居眠り、授業以外の勉強、携帯電話・メールの人数

が増えるとともに、前方でも目につくようになり、明らかに授業に集中していることが確認できた学生は左前方の4人だけであった。

5. ピアレビュー意見交換会・検討会

評価・FD専門委員会では平成19年度に平成20年度のピアレビュー実施に関して話し合い、11月頃に半数の部会が公開授業を提供して教育部会員(部会長・幹事)と評価・FD専門委員によるピアレビューをすることにしたが、その際、ピアレビュー期間終了後に関係者による懇談会を行い、平成20年度のピアレビューについて評価をし、問題点をあげて改善案を検討することにして、それを平成20年度の評価・FD専門委員会へ申し送った。ピアレビュー意見交換会・検討会(以下、「検討会」と略す。)はこの答申通り、11月のピアレビューウィーク終了後、12月17日に開催することになった。当日15名が参加して議論した。内訳は、全学共通教育部長、外国語部門長(国際コミュニケーションセンター長)、大学教育支援研究推進室教員2名、教育部会員11名であり、彼らのうち4名は評価・FD専門委員であった。15名のうち12名がピアレビューをしており、2名がピアレビューを受けた授業担当者であった。また、どちらにもなっていない参加者が3名、どちらもつとめた者が1名いた。検討会では参加者が感想を述べたのち、今後の課題や改善策について話し合った。⁴

特徴的だったのが、複数の参加者から異口同音に「他の教員の授業を参観したのは今回が初めてであった」という言葉が発せられたことである。そして、皆今回の参観が有意義であったと評価した。有意義といっても、必ずしも参観した授業が優れており、学ぶところがあつたからというわけではない。確かに理系の教員が文系の講義を参観して、「久しぶりにオーソドックスな文系の講義を聞いた。黒板とチョークの授業もなかなか工夫されており、これもなかなかよいものだと感じた」といった趣旨の感想を感慨深げに語った。また、検討会で配布された評価シートの自由記述のリストからも、いくつかの授業について、学生へのかかわりやIT活用法、スライドの作り込みのうまさなどについて参観者が感心していることがうかがえる。しかしながら、ネガティブな面について再認識し、いろいろ考えさせられた参観者もかなりいたようである。私が参観した授業でも見られたように、授業開始を大幅に過ぎてもそろそろ教室に入ってくる遅刻者や途中で黙って教室を抜け出していく早退者の存在、教室の前の方と後ろの方の学生の受講態度の違い、授業と関係ないことをしている学生とそれを全く注意せず淡々と自分の話を続けていく授業者のことは自由記述欄に書かれていたし、検討会でも耳にした。

検討会では最後に今後の課題と改善策について話し合った。そこでは、参観者が全体的に少ないのもっと多くすべきこと、ビデオの活用も検討すること、授業を見せる側

を選ぶ方法・ルールを検討した方がよい、などの提案が出された。一方、評価シートの結果を直接授業担当者には見せない方がよい、しばらくは同じ方法で続けるべき、検討会もためになるといった意見がだされ、今回のピアレビューウィークがある程度満足いくものであり、今後も継続すべきという結論になった。最後に、全学共通教育部長が「やるからには参加者の授業の質向上につなげるものにしなければいけない。次回はピアレビューを受ける授業者は授業案を作成して、参観者に授業前に渡した方がよい。」という話をして検討会が終了した。

6. 討議

大学教育の文脈で用いられる「ピアレビュー (peer review)」という言葉は、広義には同じ教授会 (ファカルティー) のメンバー、すなわち同僚による教育評価あるいは教員評価という意味をもつ。ただし教員評価という意味でのピアレビューといっても、教員の人事に関係する総括的評価 (summative evaluation) のためのピアレビューがあれば、教員自身の教育に関する資質向上のためになされる形成的評価 (formative evaluation) もある。後者の場合には、レビューする側にとってもよい研修となることもある。Chism (1999) はそういう役割をFDとして推奨されているが、ひとつのピアレビューを総括的評価と形成的評価のどちらのために実施するかを明確にすべきであり、決して混同したりすりかえたりしてはいけないと述べている。総括的評価のための評価者に自分の授業を見せるなら、授業者はかなり防御的になり、悪いところはできるだけ隠してよいところばかりを見せようとするだろう。一方、形成的評価のためということなら、自らが悩んでいるところ、うまくいかないところ、悪い癖や修正すべき点を見つけ出してもらえよう、できるだけ通常の状態であるいは、問題が生じやすい状況を再現して授業をして、みてもらおうとするだろうし、そうしなければ効果がない。

ところで、教員の教育力を評価するためのピアレビューということであれば、学生による授業評価も参考にすべきだろう。もっとも、学生授業評価だけ、それも1回の結果だけで教員の教育力を見極めることは難しい。Cashin (1999) は「教員の授業力を評価 (evaluate) するには、複数の授業についての学生授業評価を最低2・3年にわたって集める必要がある。・・・教員がある授業をどれだけ効果的にやっているかを知るには、学生授業評価とあわせて、ピアレビュー、管理者や委員会のレビュー、自己評価、ティーチング・ポートフォリオ⁵などを総合的に調べる必要がある。」⁶と述べている。

こうした教員評価としてのピアレビューとは別に、教員集団が互いの授業を見せ合うことにより当該集団の教育がどの程度うまくいっているかを確認し、共通認識をもち改善・向上のための方策を議論し、当該集団の教育の質向上をめざすことを主目的とする

ピアレビューがありえる。そして、その意義は大きい。このことを今回のピアレビューウィークの経験から確認できた。参加者は私も含めて、今どういう授業が行われ、学生はどのように授業にのぞんでいるかを知ることができた。そして、それぞれの気づきや感想を他の参加者と話し合うことで、問題が相対化されるとともに、より深いところにある問題について考えることができた。例えば、教室・学生の二極分化は教養教育にはつきものの深刻な問題であることが改めてわかった。

ファカルティ・ディベロップメントは熱い情熱と強い責任感だけでは進んでいかない。現実を直視し、同じ土俵に立って問題を出し合い、思いを語り合うことの中でこそ持続し、いつか花が開いていくものと考え。ピアレビューウィークが今後も参加者に多くの気づきや学びを与え、ファカルティ・ディベロップメントの土俵として定着していくことを期待している。

¹ この紀要の実施報告の3章を参照

² 同 4章を参照

³ ピアレビューウィークの実施記録(スケジュール表)はこの紀要の実施報告の3章の表1を参照

⁴ 検討会での発言内容についてはこの紀要の実施報告の4章を参照

⁵ 授業の善し悪しを評価するにも教員の授業力を評価するにも、シラバス、授業全体の設計、教材(教科書・参考書・参考文献リストも含む)、成績評価法(試験問題、採点基準も含む)なども評価対象にして総合的に評価する必要がある。ティーチング・ポートフォリオはこうした評価対象を教員自身が整理しファイリングしておき、評価者が監査できるようにしたものといえる。

⁶ 筆者が2007年にオーストラリアのシドニー市にあるキャリック高等教育研究所を訪れ、デニス・チャルマー部長にインタビューした際に、彼女はオーストラリアのある大学の副学長をしていたころ、その大学で毎年教員がティーチング・ポートフォリオとリサーチ・ポートフォリオを合わせたアカデミック・ポートフォリオを大学に提出して教員評価を受けるようになったこと、そして、ピアレビューはティーチング・ポートフォリオを作成するために各教員が受けるものであると述べた。

文献

Cashin, W.E. 1999 Student ratings of teaching: uses and misuses. In Seldin, P. (Ed.)

Changing practices in evaluating teaching. Bolton, MA. : Anker Pub. Pp. 25-44.

Chism, N.V.N. 1999 Peer Review of Teaching. A Source Book. Bolton, MA. :Anker Pub.

An action study on the improvement of teaching and learning in general education:

11. An essay on “peer review”

Kiyoshi Maiya (Professor, R.I.H.E., Kobe University)

In December, 2008, the college of general education conducted peer inspections of its ten course works, which is called “peer review week”. Every two inspectors (teachers) of our faculty visited to observe each class, evaluating it by using the check & comment sheet. After the ten course works were inspected, a meeting was held where inspectors and teachers who were inspected gathered and talked together about meanings and problems of the peer review week. In this essay, the meanings and the problems to be solved or improved are discussed, after explaining its prehistory and its schedule conducted, describing four of the ten classes which the author observed, and summarizing the results of the check & comment sheets and talks in the meeting. The results of the check & comment sheets indicates that not only inspectors, but also teachers inspected were satisfied with the talk in the meeting, although they found some difficult problems in the general education, e.g., polarization in the class and difficulty of teaching different students. It is concluded that the peer review week may be meaningful in Faculty Development, because it can grow good climate in the college of general education for organizational enhancement and improvement of students teaching and learning.